

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第248号 (2025.11.16-2025.11.23)

◆ 参加者: クイスケ、カオルル、中川 晶子、汐田大輝、あづみのマルコ、しまねこくん、藤岡あや、aizoi、塩の司厨長、真白(ましろ)といいます。、笛地静恵、天然石アクセサリー、Eva's、水井良柚(りようゆう)、山田真佐明、Nichttrübschen、砂原妙々、アリタ別館、石原とつき、蔭一郎、松本清展、都まなつ、水の眠り、西沢葉火、美鼻角(ひちゅうかく)、宮坂愛哲、岡村知昭、鈴木正巳、季川詩青、砂のような、西脇祥貴、安藤蜜豆、青海波、雷(らい)、あしあと、不思議な話のアイン、東ころ、なさむこ、霧雨魔理沙、三明十種、まじけい、おがけん、非常口ドット、石川聡ゆずる、しろとも、まお、鯖詰伍太郎、雨声、ひいらぎ、片羽雲雀、何となく短歌、古城えつ、夜ボエム寄る?、気まぐれさん、たけゆきこ、よもやまさか、月波与生(五七名)

◆ 川柳・俳句

遊女の額を単品で頼む クイスケ
意味から来て青へ去る中島みゆき 西脇祥貴
空白をなにて埋めるか星月夜 真白
哲学はコレステロールに満たされ アイン
ペコちゃんもカーネル・サンダースも冬着 蔭一郎
ガリレオと会う庭園の喫煙所 蔭一郎
冬服の下は裸の風呂上がり 蔭一郎
石垣の隙間にジャック・ニコルソン 蔭一郎
鞆から真鴨の顔だけ出る車内 蔭一郎

酸性の挙手はうるさい 都まなつ
 抜き取った骨の水葬 都まなつ
 重石まみれの古代都市 都まなつ
 あらゆる草の食べ歩き 都まなつ
 一兔も追えたことはない 都まなつ
 午前四時から擬態…鳩 都まなつ
 陰口のタン塩セット 都まなつ
 天狼の子守唄ロジックは眠る 片羽雲雀
 月に一度はほうれん草が転ぶ Das
 つめたさも命と思う冬の海 しろとも
 新旧のへのへのもへじ非売品 石原とつき
 あおぞらともぐらの変をひた隠す 石原とつき
 星の名に変わるあなたの記憶 藤岡あや
 寒弾や師匠がぼけえと怒つとるで 鈴木正巳
 ドレスコードの角隠し Nichtraucherchen
 ラオスにもあった貴婦人製造機 汐田大輝
 ドジャースの肩間に皺のドクトリン 汐田大輝
 泣くときは甘海老になる老婦人 汐田大輝
 十代に戻りたくなし冬の蝶 しまねこくん
 マフラーが二本あつたら二本巻く しまねこくん
 心から病の上をタンバリン 山田真佐明
 ハロウインの仮面のままでいい夫婦 美蟲角
 特選を貰って欠けてくる余命 清展
 甘鯛の「あ」の口先を煮てをりぬ カオルル
 読み違えた文字で見えてはいた景色 雷

*

気まぐれに戸を叩くひと初時雨 あおい
 休み取ります馬鹿のため 笛地静恵
 渋皮のメロディー唇で聴く 天然石アクセサリーTiki's
 冬の庭に訃報という名の静寂 水井良柚
 冬ざればワインレッドの夜もあり 砂原妙々

あの頃は待ち切れないと思えた日 アリタ別館

シモーヌ・シニョウ器科通い 西沢葉火

ハロウインの仮面のままでいい夫婦 美蟲角

小雪やチキンレースの半ズボン 宮坂愛哲

きれいだねシカせんべいの降る今夜 岡村知昭

遠くまで来たのに、月がそこにいる 安藤蜜豆

きみからの足跡ハートになつて恋 東ころろ

いつまでも海に揺られて寝ていたい なさわこ

左耳、右耳ふさぎ冬の海 三明十種

カラカラの喉が呟く除湿やん おがけん

つめたさも命と思う冬の海 しろとも

ポチであらう 名前告げられ 冬の海 鯖詰佐太郎

きみ木の葉ももうすぐ握手ぼく狐 ひいらぎ

眠れないこんな日もある JAZZを聴く まどけい

一匹の餓狼の狼雅 石川聡

もふもふのぬくもりを抱きしめて寝たい夜 気まぐれさん

*

鏡文字に映える羅紗緬の微笑 月波与生

◆ 短歌

石ころを弟が蹴る父が蹴る私が拾って妹が蹴る 古城えつ
「『右』上3本線の先震える手では押せない「止まれ」 あ
しあと

*

例外のような雪虫 何食わぬ年末なのか 秋和 明
作りかけ彗星の青を抱きしめて君の笑みだけ胸で鳴りだす
あづみのマルコ
星の名をくれたあなたは戻らぬ 哀れにかがやくばかりの
仔犬 藤岡あや

押しボタン式の人生なんてタダお待ち下さい唱える日を
塩の司厨長

寂しさは言葉に出来ず柔らかに 抱きしめてみる遠き陽だ
まり 真白

ジャリジャリと足裏だけが泣いている絶望の淵 光はいず
こ 水の眠り

真つ白なひっそり閑の手帳へと置いてみましたりんごをコ
トリ 砂のような

「右手上」本線の先震える手では押せない「止まれ」 あ
しあと

Chinese 金平糖と踊りましょ 鍵盤上に 国境は無い 霧雨
魔理沙

朝焼けか夕焼けだかに目をこするもうどちでも良いやス
ランバー 非常口ドット

いつになく優しい君の一言に 隠された嘘 僕は傷つき
ゆずる

駅近は本当に駅近くだと気付いた春はもう五年前 季川詩
音

虹彩の目撃者が投げられた「どういう時に神様がいます
か？」 雨声

そら浮かぶ かつては爪と呼ばれてた かけらのような一刷
毛の白 何となく短歌

雨の日はタイムラインに泣かされる君にジェラシー醜いわ
たし 夜ポエム寄る？

◆詩・短文

ゆ

声がする森の湯気のたなびく朝

太郎は空気清浄機と遊ぶ

て
土の匂いが風に乗って夕焼ける
次郎は換気扇の手を抱きしめる
ひ

眼鏡がくもって昼にないた鳥

士郎は可視光線と昼寝の床にいる

マ

猫と木魚とじやれるマタタビの

永遠の地雷 試合 延長する（山田真佐明）

凍るまでいかぬ白息夜の

冷えきったざらりプールサイド

風呼ぶぬらり寝返りを打つ波

言霊のフカが散歩する

ゆらりぬらり打ち寄せ引いて

行ったり来たり少し狭い

背鰭が一つ背鰭が二つ

兎は剥いだことあるけれど

背鰭が三つ背鰭が四つ

羊なんて見たことない（青海波…『フカと夜』）

◆作品評から

恋人よ寿司も回れば観覧車 西沢葉火

　　～本日スシローへ行ったら回転寿司レーンがガラリと変わっていて驚いた。もはや寿司は回転せず洗練されたオーダーシステムである。葉火さん、寿司は回らなくなったのだ。（月波与生）

胎内に眠りの浅いユニコーン 空野つみき

ツチノコを前立腺に住ませる 岡村知昭

　　～体内に何かが居る2句。作家性が違つと住ませるものがこうも違うものかと苦笑。(月波与生)

目貼してペペペペランは宇宙船 カオルル

　　～そうだペペペペランは宇宙船。ということを知り、消化できるかどうかが川柳の楽しみ方に関わるところ。了解すると手前の「目貼」の付け方にも関心してしまう。(月波与生)

鳥の名のひと文字をとり 都まなつ

　　～575の下5を取ったような句。これでジュニーク完成型とみるかは微妙なところ。でもまずジュニークはこのような句会から展開されていくのだろう。(月波与生)

読み違えた文字で見えてはいた景色 雷

　　～思い違いつてなかなか怖くて、一回そうだと認識すればそのまま過ごしてしまう。だから全く違う景色が見えるんですね。(季川詩音)

鞆から真鴨の顔だけ出る車内 蔭一郎

　　～何と可愛いらしい(たけゆきこう)

作りかけ彗星の青を抱きしめて君の笑みだけ胸で鳴りだす
あづみのマルコ

　　～上の句「作りかけ彗星の青を」が好きです。流れる星の若い青色がイメージできました(水の眠り)

ラオスにもあった貴婦人製造機 汐田大輝

　　～「ラオスにもあった貴婦人製造機」。「にも」ということは、他の場所でもあったのだらうと思います。貴婦人は、単に身分の高い女性のことだけではなく、マスコミが用い

る鉄道用語でもあるようです。なかなか面白いです。(季川詩音)

シモーヌ・シニョウ器科通い 西沢葉火

ゝ泌尿器科へ行くときにふと呟いてみた、そんな感じの12音。シモーヌ・シニョウ氏の御身体の具合、心配になります。フランス語の音感つぼさを駄洒落つぽく一句にしから、シモーヌ氏の足取りの重さと寂しさが、読んでて伝わってくるのは、どうしてなのでしょう。(岡村知昭)

マフラーが二本あつたら二本巻く しまねこくん

ゝ十本あつたら八本巻く (よもやまさか)

耳、右耳ふさぎ冬の海 三明十種

ゝ一句の中にミが6つもある！ミ由来のヨの子音とi母音の畳み掛けによる独特の韻律感が気持ちいい！(石川聡)